死者との絶えざる対話

――沖永良部島のコイ（弔い泣き）と死者儀礼――

酒井正子

先祭祀に広げて考察してみたい。未だ調査途上にあり、[3] 現段階での報告であることをおことわりしておく。

1、はじめに

死者に対して声をあげて泣き、語りかけることは、琉球弧全域にみられるベーシックな葬送の習俗であったと考えられる。[1] それは別れや喪失の根源的な表現であり、儀礼的、象徴的、奏演的にあるいはジェンダーの視点から重要な意味をもつ。[2] のみならず、独特なフシづけがなされ、ことばと音楽の関係や様式性を考える上でもきわめて重要な研究課題といえよう。

しかしこれまで具体的なテクストはあまり報告されてこなかった。遺体を前にしなければ行われない突発的、脈絡限定的なものである上に、不吉とされタブー性が強く、記録が困難であることがその大きな原因だと考えられる。本稿でとりあげる沖永良部島のコイは、その意味でも数少ない貴重な事例であろう。

本稿ではコイのテクストの内容と様式性を検討し、そこにみられる死者との濃密な対話の世界を、同島で行われるフズヌエという祖

2、沖永良部島のコイ（別名ワーワー）

一九八三年七月一九日に収録された二例の録音資料が残されている。演唱者は和泊町国頭集落の当時七三才の男性（一九一〇年生）で、民謡の歌い手として活躍した方である。前年の一九八二年末に、小泉文夫及び東京芸大民族音楽ゼミナールが調査に訪れ、はじめてコイという弔い泣きがあることを知った。小泉が「それはフシがありますか」と問うと、演唱者は「そうです。とっても涙の出るようなフシがあります」と答えた。小泉は「それはシマウタの原点ではないか」として、「短かく、こういうようなフシだ、というようなことでいいから歌ってみていただけないか」と依頼したが、その場ではできないと断られた。しかし後日録音して送ることが約束され、七ヶ月後、演唱者自ら満月の夜国頭岬に出向いて収録したテープが

東京芸大に送られてきた。

以上のエピソードや演唱者の手紙からは、収録には大変苦労したこと、それだけに失われゆくコイへの強い愛着、なんとしても記録しておきたいという執念があったことがうかがわれるのである。ワーワーとは幼児言葉で、あんまり騒がしくするのでそう言ったのだろうという。演唱者によれば、

これは不吉とされておりどこでもうたえる、泣けるものではない。今は私一人しかできないだろう。昔から近親者が亡くなると、葬式から四十九日までずっと泣き暮らす。主に女性が頭からすっぽりとウチュクイ（頭巾）を被ってするのだが、私は五、六才の頃から関心があり、墓にみにいっておぼえてしまった。国頭集落では大変盛んだった。

という。日常のごく親密な呼称（じいちゃん、のような）そのままに、おじいさんにはジャージャー、おばあさんにはアジー、お父さんにはアチャ、お母さんにはアマ、子供には童名で呼びかけた。

今は情がうすく、誰が亡くなってもみな押し黙って涙を流すだけだ。あれは泣いているふりをしてるにすぎない。気が晴れるまで大声をあげて泣いたらよいのにと思うが、なかなかコイはしてくれない。コイにはわめいたり、泣いたり、うたったり、号泣する部分が多々ある。別れに対する人間の真髄を泣き悲しみ、わめき、叫び上げる。クライマックスではあるだけの力を振り絞り、声と涙を出し切ってしまう。(4)

とも述懐している。

私はこのテープをもって、九八年二月に沖永良部島にゆき、先田光演はじめ国頭集落の長老の方々の協力をえて歌詞その他の聞き取りを行った。それによれば、

四十九日までは毎日墓参を欠かさず、(5)朝晩墓からワイワイとコイが聞こえてきたものだ。ところが一九七一年に火葬場ができて焼かれるようになってからは、心がさっぱりとしてあまり泣かなくなった。

という。そして、テープを聴いて、「遺体を前にしなければできないものなのに、えらい。本当にこのとおりで、作ったようではない」と口々に感嘆された。

傍らの人が「ガンドーヤ（そうだね）」「ニゾサヤー（可哀想に）」などとあいづちをうち、交互に掛け合うようにしてうたい継ぐこともあったという。

コイの具体的なテクストは別の横組み資料のようである。

これは一四年前に亡くなった母に対するもので、シマムニィ（方言）で語られている。便宜的に①から⑦に区分した。全体の構成としては、①まず亡くなった母の霊を呼び、②③で生前の困窮をリアルに想起しつつ切ない感情のたかまりを導く。④はクライマックスで、葬儀で眼前に死に装束をつけて横たわる母に「どこにいくの、自分も連れていって」と訴える。⑤では母の霊を傍らにおき細々とかたらい、⑥死後の家族の消息や生活ぶりを知らせ、⑦で気をとりなおして別れを告げ、あの世の親族への伝言を託しつつ送る。総じ

コイ（ワーワー）和泊町国頭、1983年７月19日収録。1910年生男性による。
（東京芸大民族音楽ゼミナール資料。書きおこしは酒井。網かけは泣き、メリスマ）

①アマち　はたら	お母さんに語ろう（1969.7.22　没）
私がとても敬愛しているアマよ	
アンマーーー　アマよー　アマよー　アマよーーー	アマ（お母さん）よ　アマよ・・・・・
ふんゆぬ中にてぃやー　一番はなしゃったぬアマよー	此の世の中で　一番いとしかったアマよ
アマよー	アマよ
うらなま　ぬーはしゅうよ　なま　ぬーしゅいよー	あなたは今　何をしていますか
たるとぅ　むんがたいしゅいよ　でゃアマー　アーー	（あの世の）誰と物語していますか　アマよ
アマ　うらなま　たるとぅあしどぅよ	アマ、今誰と（歌い）あそんでますか
たるとぅあしどぅよーーー	
たるとぅ　むんがたいしゅいよー	誰と　物語りしていますか
うやくぁーぬ中ぬ　うやくぁーぬ中ぬよーー	親子の中の（誰と）
②わてやアマ　あわりむん　しゃんでゃーやー	私とアマは　哀れ（貧乏・苦労）もしたね
あわりむん　するかいどぅしゅるやー　アー	本当に　哀れもするだけしましたね
アマが　いきちゅいにやー	アマが　生きている時には
ご馳走うほーさ　おいしゅきゃ　ゆかたぬむんや	ご馳走を沢山　食べさせてあげればよかったね
なまや　みしやーち　いくとぅ	今では　店屋に行くと
とぅいぬ　ぶつ切りむや	鶏の　ぶつ切りも
まんでぃあしがや　アマー	たくさんあるよ　アマ
アマが　いきちゅいにわー	アマが　生きている時には
ぐぁんしゃぬむん　あんまい　みゃーらじぃや	そういう食べ物も　あんまり無かったね
アマが一番好きやったぬそうみんむ　うふさんどやー	アマが一番好きだった素麺も　沢山あるよ
うぬとぅきぬ　そうみんぬあい　なーだなたんでゃやー	あの時には素麺は無い、無かったしね
まーさむん　うほーさ　おいしーどぅー	おいしいものを　沢山食べさせてあげて
あまーぬゆーちアマ　うくらんでぃむとぅたぬむんー	あの世にアマを　送ってあげようと思っていたのに
なまやればよー	今であれば
とぅいぬししむ　アマが一番好きなそうみんむー	鶏の肉も　アマが一番好きな素麺も
がばどやー	たくさんあるよ
③アマよーー　アマよー	アマよ、アマよ
アマがや　ふぬまま　シュートゥイシマかでぃー	アマが存命中は　シュートウイシマ（白く小さい甘藷）を食べて
ほーぬみじぃ　がぶがぶ　ぬでぃ	川（湧水）の水を　がぶがぶ飲んで
わた　みちゅーたんでゃやー	腹を　満たしたね
アマが　うたいにわ　ゆぬ中ぬ　悪さぬやー	アマが居た時には　世の中が悪くてね
アマよー　かみゅむんむ　なーだなやー	食べるものも　無くてね
アマとわちゃが　しゃぬ　哀れや	アマと私がした　哀れな苦労よ
わぬや　ふぬしけに　ぬくとぅてぃー	私は　この世間に　残っていて
ぬうむ　みじらしゃ　なんでゃやー　アマ　アマーー	何も　面白いことはないよ
アマよー　アマでやーー　アマでやー	アマよ　アマよ・・・
ちばらわ　やりごーちばらべーや　アマがー	着物は　破れ着物ばかりね　アマは
人間わ　やりごーちばらべーやー	人間は　ぼろ着ばかりね
アマが　ちゅらちばらきちゃぬくとぅわ　なーじぃー	アマが　きれいな着物を着ていることはなかったが
④ひゅーわ　がんし　ちゅらちばら　きちゅてぃ	今日はそんなきれいな着物（死に装束）を着ていて
ひんが　ちゅりゃーアマー　ちゅりゃーでゃアマよ	ああなんて、きれいなアマ、きれいだよアマ
アマよーー　アマよー	アマよ、アマよ

うら　うだちよ	あなたは　何処へゆくの
わちゃ　ちゅいちゃ　うちち、わちゃ　うちちやー	私を一人置いて、私を置いて
うだちよアマー　うだちょでやー	どこへアマ、どこへ行くの
わちゃも　添うてきよー	私も　連れていってよ
あぐし　添うていきで、アマ	一緒に連れていって、アマ
うら　ちゅいべ　いかんこーよー	あなた一人で　行かないで
しにばど　人間わ　ちゅらさしにばどやー	死んでこそ　人間はきれいに死にたいものだ
ちゅらちばらむん　きゃゆるやー	（そうすればあの世で）きれいな着物を着られるよ
らくし　あしばゆるやー	楽して　あそぶこともできるよ
うらー　アマ、アマよー	あなたは　アマ、アマよ
うら　うだちよ　うだちよでやー	あなたはどこへ、どこへ行くのよ
⑤なーあまく　わんに　みゃーりよー	もうしばらく　私に（姿を）見せていて
わんに　みゃーりよーやー　わんにみゃーりよやー	私に　見せていて下さい
わなよアマー　アマよー　アマー	私はね、アマー、アマよ・・・
ひゅーぬゆるや　わてぃ　ゆっくりはなさやアマ　アマよー	今日の夜は二人で　ゆっくり話しましょうアマ　アマよ
わんな　うら　生きちゅて　いちゅんでや	生きている時には　いくよ、と
わな　いちゅんでやでぬむ　ちゅくちむ　なんこ	私はいくよ、ということも一言も無かったし
わな　死にゅんであでぬ　くとぅむ	私が死ぬということも
ちゅくちむ　なんこーや	一言も　無かったしね
がんししぇー　ぐるぐるー	そのようにして　あわただしく
いちゅむであれ　いちゅむで　いえばどー	いくにしても、いくと言ってくれれば
ちゃんとしゅぬくとぅむ　すらゆるー	ちゃんとするべきことも　できたのに
浅ましやしけに　うまれてや　うしが	かりそめの世に　生まれてはいるが
やすやすと暮らす　ひまむなじぃ　ひまむなじぃやー	やすやすと暮らす　暇という暇もなくて
がんどーやー　がんどーやー	そうよ、そうよ
ちばてぃ、ちばてぃいきよアマー	がんばって、あの世にいって下さいアマ
まーとぅ　なまーとぅわ　しけぬ　ちごてぃやー	この世とあの世は　世間が違ってね
わんなよアマ、うらみゃんくわ　くらさらしがー	私はあなたを見ないで　暮らすことはできないが
わんにうほーさ　ひゅーぬゆるや　みゃーりよやー	私にいっぱい今晩は　あなたの姿を見せて下さいね
どおか、うらがうむとぅぬくとぅぬ　ありば	どうか、あなたの思っていることがあれば
うほーさ　はたてぃくりりー	いっぱい　語って下さい
⑥うらがぬくちゃぬ　わうとぅびんちゃよー、うとぅびんちゃよー	あなたが残した 私の弟妹たちよ
Yは　ふずみちなて　もいしよ	（弟の）Yは一昨年亡くなった（船員、海難事故死）
Kとわてわよ　わーとじぬKとわてわ	Kと私、私の妻のKと私は
三崎んたにぃ　葬式いじどーや　いじよー	三崎まで葬式に　出かけましたよ
あがんしゆかぬ人間　あがんしゆかたぬユシむ	あんな良い人間、あんなに良かったユシも
葬式ちゅらさしよー　みんじょうぬぐとぅし	葬式も立派にすませ　人形の如く
もいしじゃんどーや	亡くなっていきましたよ
うりがさ　はたらやー	これだけ　教えましょう
うりからなま　ゆぬ中ぬゆかなて	それから今、世の中が良くなって
かまんでむーりやー　めーむまんでー	食べようと思ったら　米（食べ物）も沢山あって
わっちゃが　アマが　うたにぬくとぅとぅ	私たちは　アマが居た頃と
全然ちごて　ぬーむ　ゆかぬ	全然違って　全て良くなりました
まがんちゃむ　ちゅらがんちゃまがぬ	孫たちも　かわいい孫が
たいむできてや	二人もできて
うりたとぅ　なまは立派に　はんし暮らちゅんどや	その子たちと今は立派に　こうして暮らし

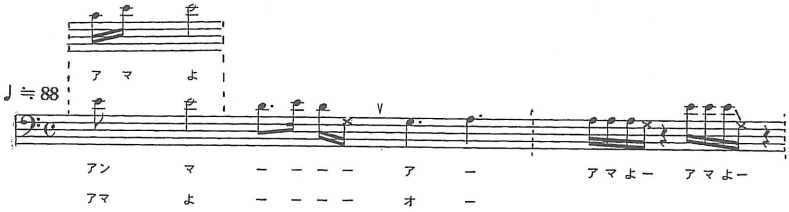
	ていますよ
ぬーむふんゆぬ中に　なーぬむんわなん	何もこの世の中に　無い物は無い
あまがうたんゆとぅは　とてもちごてぃ	あなたが居た頃の世とは　とても違って
がんしゅんとぅに　安々とぅ　安々とぅ　もーりよ	こういうことだから安らかに　あの世にいって下さい
うらがまーにうてぃ　Ｙむけたぬはずでやる	あなたがあちらに居て　Ｙを迎えたことでしょう
ジャージャーた、アチャた、	おじいさんたち、お父さんたち
アマゆか　さっちもいしじゃぬ　キョーデーち	アマより早く逝った　兄弟親しい人たちに
ゆかーゆかはなしし　はたてぃたぼり	よくよく話し　語って下さい
なまあぬヤマが　はんがんしはなちゅんどーぢち	今あのヤマ（童名）が　こういうふうに話しているからと
ゆかゆかぬくとぅ　聞かちたぼり	いいように　聞かせてあげて下さい
⑦アマよー、なーふりしまた、またまた、	アマよ、もうこれでまたまた
なー四、五年しから　また　はたやぶらや	もう四、五年してから（＊１）　また語り合いましょう
ふりし別れやぶらや　ちばってまた	これで別れましょう、頑張ってまた
いじてぃ暮らちたぼりよ	（あの世に）行って暮らして下さい
アマよー、アマよーー　アマよー	アマよー　アマよ・・・
なーちゅっけい　また　はたやぶらや	もう一度　また語り合いましょう
なーちゅっけい　また　わんみゃぶらやー	もう一度　また会いましょう
ちゅらじゅらとぅぬ　アマよー	素敵なきれいな　アマよ
わんなわよー、なま　ふぁじや　ねーぐとぅてぃ	私は今　足が萎えていて
うとしゃなっとしが　うりちむ	大変になっているが　それでも
あのジャージャーが　わんち言しゃぬぐとぅし	あのじいさんが　私に言い聞かせていたように
うらは、吉光、世の中のために尽くし	「おまえは吉光、世の中のために尽くし
世の中の人に　むーるゆかゆかし　おいしりよーや	世の中の人に　全部よくしてあげなさいよ」
ちど　わんち毎日　ジャージャーが	と　私に毎日　おじいさんが
わんちゆうたんとや　うんため　しゅんどーちち	言っていましたよ　そのためしていますよ
またなまから　しらんでむーとんどーち	またこれからも　しようと思っていますよ
がいち　はたてぃたぼり	と、そのように　語って下さい
どうか　お願いしゃぶら	どうか　お願いします
ぬーくとぅまんこー　ゆかゆか暮らちてたぼりよ	何も思い煩うことなく　心安らかに暮らして下さい
わんむな　ふぬ病気ぬまさていきゃな　ふり	私も　この病気が進行してゆけば　これ
ふぁいどぅなーゆるしゃー　ゆかあやぶんさん	あの世にゆくしかないでしょう　いいですか
どうかゆっくりまた　まじおーやぶらや	どうかゆっくりまた　そこで会いましょう
はい、さようなら、うがさーでろど	はい、さようなら、これだけですよ
別れぬ時に　別れぬうたし　おいしゃぶら	別れの時に　別れの歌をしてさしあげましょう
〽わかれてやいちゅい　ぬしなさけしるがヨ	別れてゆくのに　何で情けをかけられるか
うたんちゅむなさけ　かけておいしら（＊２）	歌でもうたって情けを　かけてさしあげましょう
うがさど、はいさようなら、お互いに元気で	それだけです　さようなら・・・
あんたも　元気したぼり	あんたも元気にして下さい

言葉ばかり入ったので、少しワーワーの方をこれから入れようと思う。
ちょっと言葉ばっかりで歌の方がちょっと入っていないので。（満足なできではない）

＊１　脳梗塞で歩行も不自由な闘病生活を送っており、余命が長くないと感じている。

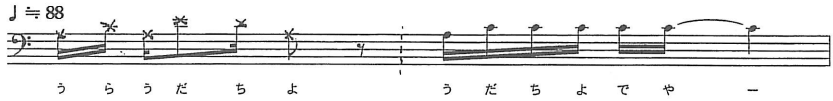
＊２　≪手酌≫のフシにのせる。祝の座で相手の杯に酒を注ぎながら、即興的なあいさつの文句を色々歌った曲である。

【譜例 1】コイ①　3行目（部分）



注. ⁞ はフレーズ区分，Y は音高不確定な音を表す（以下同じ）

【譜例 2】コイ④　12行目



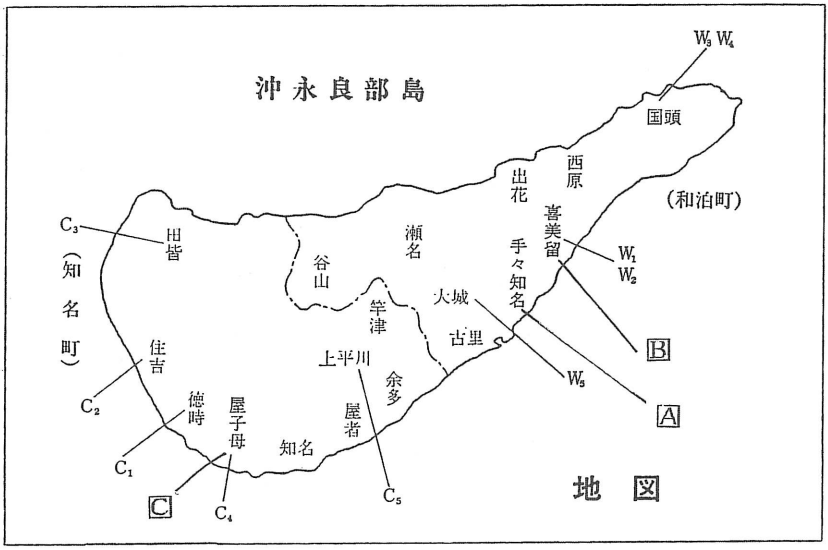
注. 第1フレーズは方言のしゃべり．第2フレーズはそのメロディー化されたもの。　［短2度下］
「うだちよ」という歌詞の始め2シラブル目までは、方言のイントネーションをなぞる動きがみられ、その後は一定音高となり、ことばのイントネーションを離脱する．

て貧困のうちに母を死なせたことへの悔悟の念があふれている。

音楽的な調子としては、①の導入部は高音で積極的にうたいかけ、②③では一転しんみりした調子になる。④まではウタ状態が優勢だが、⑤以降はしだいに語りに転じ、しゃべりが多くなる。終わりにウタ（≪手酌≫）が挿入されるものの、しゃべりとウタは分離したままで終っている。演唱者もこれは不本意であったらしく「しゃべりの方へとことばが走りワーワーに向かわなかった。実感がわかなかったから」という。そして、ウタをうたうとコイにいきやすいからといいつつシマウタの≪いちきゃ節≫をうたいなおし、再度、海で亡くなった弟へのコイを収録している。(7)

全体に、呼びかけ、泣き、しゃべり、ウタが未分化で流動的な連続体をなしており、要所では繰り返しアマ（母さん）と叫ぶ。そしてそのまま声をひきのばし、ストレスをつけた「泣き」の状態で音程を変化させる「泣きうたい」ともいうべき調子がみられる（譜例1。テクストのそうした調子の部分を網かけで示した）。

テープを聴いた八〇代の女性は、この「泣きうたい」の部分を「コイしゅむ（コイをしている）」、一方あとの方は「ムンガタイ（物語）のようだ」と評した。この「泣きうたい」こそまさにコイを特徴づけるものであり、かつては「スペインのフラメンコ」のようだった、という人もいて、かなり起伏のはげしい激情的な表現がなされていたことが想像される。また、ことばが通常のイントネーションを離脱して平板な同一音程をとり、ウタ状態に移行してゆく傾向が随所にみられる（譜例2）。



C 1~5, W1~5 は、1970 年当時のユタ［山下 1977: 233］
A B C は、1999 年の酒井調査による。

さてこのテクストには、葬儀の現場と、母の死後一四年を経た時点の状況が交錯して出てくる。たとえば④の「そんなきれいな着物を着て、どうしたの」「私も連れてって」とか⑤の「がんばって、いけよ」[8]など（下線部分）は、まさに葬儀の場での、遺体を前にした決まり文句であり、私自身実際に聞く機会があった。その折りには出棺前に近親の女性たちが一斉に手をさしのべて遺体の頬をなで、「オッカン、もういやだよ、あなたがいなければどうしていいかわからない」などと口々に泣きじゃくりながら語りかけるのを目の当たりにしたのである。

一方⑥⑦のあたりは、毎年旧正月の月に同島で行われるフズヌエという死者供養の儀礼での対話を思わせる。次にその事例の概要を報告し、ユタを介して死者との対話がいかに導きだされていくかをみてゆくことにしよう。

3、フズヌエ…儀礼の概要

フズヌエとは「本尊（フズ）の祝（ユエ）」［柏 1975: 127］「去った人の祝い」（一九一三年生談）「祖同（フドゥ、祖先を同じくする人）の祝い」（ユタA談）などといわれ、俗には「去った年（フズ）を無事に過ごした祝い」とする人も多い。ともあれ最高の祖先供養であり、この祝いにより、死者は天の庭に昇って神あそび花あそびができるとされる［先田 1989: 142 他］。詳細な事例報告は私の知る限りこれまでない。

各家庭では、ハミウルシ（神降ろし）[9]により死者の霊が降りた人が一家の祭祀者となって、ショージというカミ祭りを行っている。毎月、あるいはハミズキ（神月。一・五・九月）の朔日にショージゴー[10]の泉で米を洗って霊を祀り、水をもらってきて家の先祖棚に供えたのち家内を浄め健康を祈願する。特に旧正月の月はユタを頼み、祀っている死者の霊の名をあげ降ろしてもらってフズヌエをし、合わせて生きている人の健康祈願（請願、グヮーヌ、ジューグヮーヌ）をセットで行うのである。これは、死者が生者を守るという観念のきわめて具体的な実践だと考えられる。

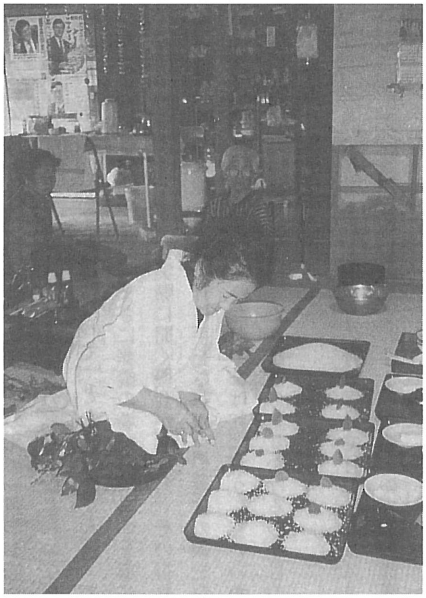
フズヌエを依頼できるユタは現在二人おり、A（一九二六年生）は奄美大島名瀬市で成巫、またB（一九一三年生）は数年間のカミフリ（巫病）を経て依頼を受けるようになり、義理の叔母もユタとして知られていた。島内には他に沖縄出身の有力なユタCがいるが、フズヌエは行っていない（地図参照）。

前述のコイの伝承地である国頭集落では、年輩者の家庭を中心にフズヌエが盛んである。ユタは日柄をみて依頼に応ずるのだが、九八年の旧正月の月には、ユタBの予定は一〇日先頃までびっしり組まれていた。一日一～三軒まわるといい、一ヶ月の間には相当数にのぼるであろう。一九九二年度村づくり日本一という高い農業所得を誇り、人口一二九二人、戸数三七一戸のうち専業農家一三八戸、兼業一一一戸（九二年度）という集落である。ここでの事例を以下にあげよう。

［事例1］一九九九年三月八日　HS宅　14：00～16：05

ユタAを頼み、参会者は主催者HS（主婦、一九二四年生）、夫の姉（一九一五年生）、義理の妹（一九二一年生）。亡くなって間もない夫M（一九一八―一九九八）のハミウルシを兼ねる。故Mは第二次大戦の激戦地ブーゲンビルより復員後、島で農業に従事、一時神戸にも転出。真言宗（高野山）の熱心な信徒で島唄もよくした。[11]三年間闘病生活ののち一九九八年一一月三日没、享年八〇才。

当日は必要な供物をあらかじめ準備してから、ユタを迎える。ユタの手により膳が整えられ、先祖棚に供えられる（写真参照）。儀礼の経過は次ぎのようである。



ユタによるフズヌエの膳の準備

【フズヌエ】14：45～
①勧請（となえ）
②死者の名をよび、降ろす
③死者との対話　15：00～
④ハミウルシ
⑤わかれ
⑥花米（洗米）占い、祈願[12]
⑦後生イキントー（送り）
⑧線香花占い[13]
シバタタキ
【請　願】15：50～16：05
⑨払い口（となえ）
⑩悪魔払い（炒り大豆を家内にまく）
⑪セガキ供養（玄関口で行う）[14]
―のち、直来―

①の勧請では「子孫がこのように全員集まってフズヌエをしてさしあげるので、どうか先祖のウヤカミを全部供して降りてきて、喜んで受け取って下さい」と請う。

②～⑤は一貫したシバタタキのリズムのシークエンスの間に死者との対話が挟み込まれてゆく。シバタタキとは、シークリブ（酢い九年母、別名クリブンギ）というシマみかんの小枝を手にもち、ユタの呪詞に合わせ全員がリズムをとって床をうつこと、またその儀礼のことである。フズヌエやハミウルシの際に、夕刻から明かりを消して暗い中で行うのが本来だという。葉が全部落ちるほど力一杯打ち、その香気に包まれカミがかったともいわれる。このシバタタキをしている間呪詞はフシづけてうたわれ、それは霊から発せられたことばとして聞かれる。まさに死者の来臨を示す儀礼の核心といえよう。以下にその様子を記そう。

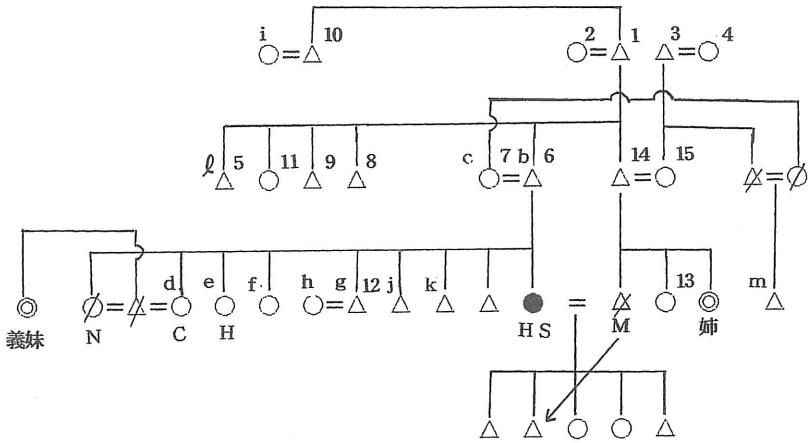
②死者の名をよび、降ろす（横組み資料参照）

開始のヒンデーワーヌとは、ユタAによれば「ひもろぎ」、即ち火の玉のような霊のことであり、ふわふわして、あちこちにくっつくという。ユタには死霊は可視的な存在なのである。続いて夫婦がハミトゥタ（ハミウルシを受けて祀っていた）ハミ（カミ）の名が呼ばれる（大正期頃までの生まれの人は童名を持つ）。夫が1～15、主婦がa～ℓまでのべ二七霊である（親族図参照）。また特に祀ってはいないが気になる親族の霊が呼ばれる。例えばmは、夫が父方の、主婦が母方のいとこにあたる近い関係である。昨年のフズヌエで「自分のことを忘れるな」とわざわざ出てきたので今年あらたにつけ加えたのだという。夫婦はいとこ婚のため親族関係が相当重る。また呼ばれる対象は直系ばかりでなく、傍系や姻族、さらには親族関係にないaも含まれる。aは他集落のタカガミ（ノロ）の霊で、ある時フズヌエの際に、突然ユタが主婦にのりこませたのだという。主婦は非常にセンシティブであり、また夫は几帳面で宗教心が厚く「あの人なら受けてくれるだろう」と祀る人がいなくなった霊をよく頼まれた。かくして祀っている霊は相当多岐にわたるのである。

② [シバタタキ](フシづけ、名をよみあげて降ろしてくる。呪詞は霊名ミチシオによる)

^ヒンデーワーヌ　でぃーすのこよ	ひもろぎ（カミの霊）この子供たちよ出て来い
なまぬとぅき　かみがとぅきゃ	今の時、カミの時に（こっちにきて祝いしよう）
まーとぅきおーち　うりぶしゃぬ	真時を合わせて　降りたいものだ
やばしぐち　とぅばしぐち	強い矢の口、はじいて飛ばす口（祓う時の口）
うりぶしゃぬ　とぅばしぐち	降りたい　飛ばす口
やばしぐち　うりぶしゃぬ	矢の口　降りたい
いしばぼがん　たまばぼがん	（骨が）石の燐、玉の燐になって
かかてぃめる　にごてぃめる	あちこちかかっている　願っている人たちみなおいで
うまれむとぅ　うしじむとぅ	生まれ元、先祖元へ
ゆびじゃしゅんど　ふきじゃしゅんど	呼び出すぞ　吹き出すぞ
H家ぬ　うやうやほー	H家の　祖先の人たち
にごたぬま　にげたぬま	お願いしよう
いしぬういに　たちいめる	石の上に　たっていらっしゃる
Mが　うがでめたるよ　うやうやほ	Mさんが拝んでいた　祖先を
ゆびじゃしゅんど　ふきじゃしゅんど	呼び出すよ　吹き出すよ
わらびなぬ　うみサブ１よ	わらび名の　思い子サブよ・・・
わらびなぬ　うみチル２よ	（以下親族図参照）
わらびなぬ　うみサトガワ３よ	
わらびなぬ　うみカンチ４よ	
わらびなぬ　うみヤマ５よ	
わらびなぬ　うみカン６よ　うみハル７よ	
うみモトフ８　うみマザ９よ　にごやぶら	
たねがしまぬよ　うやほーもと	種子島の　祖先元の
うみサブ10よ　うみハナ11よ	思い子サブよ、思い子ハナよ・・・
うみノリ12よ　うみハル13よ	（以下親族図参照）
うみマグ14よ　うみチル15よ	
うみM　ねごやぶら	
いしのういに　たちんしょうちゃる　うやふじも	石の上に　立っていらっしゃる　祖先も
うやうがむ　もろともに　にげたぬま	親拝む　一緒に　願い頼もう
デギぬよの　シマからよ　めんしょちゃるよ	出花の　シマから　いらした
うみハナａむよ　うみカンｂよ	思い子ハナも・・・・（以下親族図参照）
うみハルｃむよ　うみチルｄむど	
うみハナｅむど　うみナエｆむど	
うみノリｇむよ　うみウトｈむよ　にげたのむんど	・・・・・願い頼むよ
たびわたいな　とけわたいぬ	旅わたり　渡海わたりの
種子島ぬよ　ユンｉどむ　うみマグｊむ	種子島のユンも　思い子マグも
うみウトぬよ　うみシゲｋむ	弟の、思い子シゲも
＜うんからよ、忘れてた、ウフジャージャーヤマ、カネ＞	＜それから、忘れてた、大おじいさんのヤマと、カネも＞
うみヤマℓも　うみカネｍも	・・・・・
もろともに　にげたぬむんど	一緒に　願い頼むぞ

［事例１　親族図］



1～ 15 ： Mが受けていた霊.　　aは他集落のノロの霊.
a～ ℓ ： HS 〃 〃.　　iと 10は種子島に移住.
⟶ はハミウルシ.　　14と 12gは海難死.

③死者との対話（次々と降りてくる）――シバを叩きながら――

＊大意を共通語で述べた。なお▽はユタ、▽M等はユタが死者になりかわり語る箇所、『 』は生者から死者への語りかけ、（ ）は筆者注、≪ ≫は曲名。

▽主婦に；Mおとうさんがよ、

「私がハミトゥタ（受けていた）カミさまは、もうお終いと思っているから無理せんでいいよ、あなたの体が第一だ。姉さんにものりこませたりどうのこうのできないだろう。難儀してショージはしなくていい」

▽姉に；（足が不自由）

「たまに来てショージはし、家にもあそびにきなさい。足が痛いから無理して歩くなよー」とお父さんが心配している。

▽M「あんたが苦労して歩いているのをみると、私は暮らすに暮らせないほど辛い。病院にいても、家に帰ってきても、あんたの姿をみていると、ああ、年はとりたくないけど仕方ないなあ。こうして先だって、あんたの厄をみな私がもっていったつもりだったけど。心配して歩くなよ（本家だから手ぶらでゆけない、と気を使っているので）涙みせて歩くなよ・・・

姉『あんたら、私を連れていったらいいのに』

▽M「そんなこというなよ」

姉『私がやってることをみているでしょう』

▽M「わかってる、わかってるけど仕方ないなあ。因果をどうしようもあるか」

姉『そうだよ、だから私はあんた達にお願いしてるでしょう』
▽M「がんばって、歩けるだけは歩き、暮らせるだけは暮らして寿命だけはどうしようもないから、間違いはするなよ。涙流さんようにといっても無理だろうけど、朝な夕なこのように(姉の)歩く姿をみていて、私は暮らすこともできないが、仕方ないよなあ」
姉『そうやって歩くと、悪口いってると思われるから、そうもできないよ』
▽M「心配して暮らしてくれるなよ・・・」
▽主婦に;「息子は、寝る時には寝かして、仕事の休みにあれこれしろと頼むな」と言っている。「父がいなくても　寂しく思ってくれるな。ただ疲れている時には休ませてやってくれ」と言っている。
▽姉に;「悪口言う人が悪いんだ、世間のいうことは聞くな。そんなに気を使わないで家にも来なさい」
姉『そちら(あの世)では母さんと兄弟三、四人一緒でうれしく思っているだろうけど、私はこんなに苦労しているんだよ』
▽M「ああ、わかってるよ・・・」
——しばらくフシづけてうたう。
▽誰だろうこれは、CとHという人がいるが?
主婦;私の姉さんたちだ。
▽えー「うれしく思っているよ」と言ってる。
姉『うーん、うれしい、Nも話しなさいよ、みな寄ってきてるから』
——フシづけてうたう——
▽C・H「あんたが健康なおかげで、こうしてフズヌエもしてくれて『うん』　私を天にあげてくれる。『うん』あはあ、本当に」
姉『話しなさいよ』
▽C・H「Nも来ているよ、CもHも、親兄弟全部そろって天から降りてきて、喜んでいるよ。Mがこんなに早く来るとは思わなかったけど仕方ないね」
主婦『Nもきているか?』(Nは一ヶ月ほど前に亡くなった妹)
▽「きているよ(声は出ない)。みなきて喜んでいるから、いいことあるよ。ただ先々ショージは難儀してアンザ(海岸端の険しい崖の下にある)まで歩かなくてもいい」と言っている。今は水道の世の中とうち変わっているからね。
主婦『ありがたいが、本当に・・・』
——しばらくフシづけてうたう。
④ハミウルシ(ショージの後継者を指名する)
▽「このお父さんが受けていたカミは、ウの年の人におろしてくれ」といっている。女か、男か?
主婦「男。神戸にいる次男。」
▽あー、「それに降ろしてくれ」ということだ。それと、ネ年の人は誰かね?
主婦「ネは私自身だ。」
▽「あれがくるまでは、ネ年の人がしてくれ」ということだ。
主婦『私がですか、父さん』

▽「そして帰ってきた時（新盆に帰省予定）に、カミさんをゆずってくれ」ということだ。

⑤　別れのあいさつ

▽姉に；「姉さんにショージのことで心配かけなくていい。難儀するな、足の達者なときにはこっちに来てお茶も飲みなさい。なにやかやぐちをいって泣き歩いてはだめだよ。こうして弟のいうことを聞けよ」といっている。

姉『（色々気にしているのに）・・・人の家歩けるか（泣く）』

――フシづけてうたう――

▽M「腹をたてるな、心の中にうち鎮めて喜びに満ちているように」

▽「何の不足もなく喜んで逝った」と言っているよ、お父さんは。「するだけし、病院もいくだけいき、家でもこんなに丁寧にしてもらって。ちょいちょい家にも戻ってきて（外泊）、行ったり来たりするだけして。だけど病気には勝てんからな。」

▽姉に；「家には歩けるだけ歩いて（来れるだけ来て）下さい」

姉『うん、そのとおり、M。そうだね。うん、うん。』

なお⑦≪後生イキントー≫は後生（あの世）へ霊を送る道行きのウタ[15]であり、この時は死後間もないから、というので特にうたったのだという。

［事例2］一九九八年二月一七日　11：00～12：30　SS宅

ユタBをたのみ、参会者は主催者（主婦、六四才）。

①ワーマガナシ（かまど）拝み；台所にて、ガス台の三方にアレグミ（洗米）と神酒をたらし家族の健康を祈願。

②フズヌエ・先祖棚の前で供物の吸い物の蓋をとり、シバタタキ。四代前までの夫方の直系親族と配偶者、十代で亡くなった娘、幼児期に病死した夫の傍系親族の名をよみあげる。計十二霊

③死者の霊との対話（線香の煙のところに姿がみえてくる）

▽夫の母「がんばれよ、自分のカミさまさえ大切にしてくれたらいい。自分の親元、先祖が一番やから、家族を守ってくれるから」『がんばってるよ、おばあちゃん』。

▽夫「内地にいる娘ががんばっているからお父ちゃんはうれしいと思っているが、もうそろそろ結婚もさせてくれ」『結婚したがらないんだよ、お父さん、相手捜してよ』「相手はね、田舎に帰ってきたら沢山いる」『あんたからもそう言って悟らせねば』

▽夫の父「（生前、お供えはいらないと言っていたが）あの世にいったらお茶も好きになった」『死んだらこうするもんなんだよ』『むる（全部）、ヤマトもシマも見守っとって、元気にあらちたぼれよ。線香の灰がみんなきれいね、みな喜んでいる』

▽夫のオジ（熊本在住）「本土に墓は作ってあるけどシマが祖先元だから自分のことを忘れてくれるな」、その親友「友達みな寄り集まってきたが戦時中に海で亡くなった弟がみえない、後生でみな会えるはずなのだが。竜宮の神が供物を受け取ってないだろうから、命日には海に供え物を出すよう家族に言ってくれ」『そんなに言わなきゃわからないよね』など。

④請願　主催者と息子夫婦、孫三人の直系家族を対象とする。
・またタツ年の人が立ち、海難事故死して遺体の上がらなかった隣家の主人とされ、ユタが命日に竜宮のカミに供物を忘れぬよう指示。

［事例3］一九九八年二月一七日　14:00～16:30　NY宅
ユタBを頼む。参会者は主催者（母、九二才）、夫（ショージ執行者、九七才）、息子、嫁。
①ワーマガナシ拝み
②請願。夫婦と直系の子孫及び傍系の計十三家族及び嫁の存命家族（父方のオジ）を対象とする。途中、三八年前ブラジルに移民し三〇才で客死した息子の霊が出てきて対話。
③フズヌエ　夫の両親・兄弟、息子、嫁の祖父母・両親・兄　計九霊の名を呼ぶ。
④死者との対話

4、死者との対話

以上の事例における死者との対話の詳細をみてみよう。事例1の③では、夫Mが下りてきて、まず妻に、「私が祀っていたカミはもう自分があの世に持ってゆくから、難儀してジョージはしなくてもよい」と伝える。続いてもっぱら足が不自由で泣き暮らしている姉を気づかう。姉は婚出先の家人に「悪口を言って歩いている」と思われはしないか、との気兼ねから、外出もせず閉じこもりがちである。その姉に対し、取り越し苦労をせず遠慮なくこの家（実家）を訪ねるよう、口をすっぱくして諭すのである。

ユタはまず、Mおとうさんが「・・・・」と心配している、「・・・・」とのことだと、死者のことばを三人称の伝聞体、あるいは間接話法で語りはじめる。ところが、その途中で姉がたまらず『私を（あの世に）連れてって』と直接語りかけると、その二人称的な語りかけにこたえて「そういうなよ」「わかっているよ」と、ユタの語りは一人称に転じ、死者になりかわって直接の対話が重ねられ、フシづけてその思いが語られるのである。ユタによれば、これはもう霊がのってM自身が言っているのであって、その証拠に自分では何を言ったかまったく覚えていないのだという。

そうこうするうち、亡くなった姉妹たちもみな寄り集まり、ユタが「誰だろう、CとHがうれしく思っているそうだ」と間接話法で伝える。ここでも姉が『うれしい、（一ヶ月ほど前に亡くなったばかりの）Nも話しなさいよ』と直接話しかけるのをきっかけに「あなたのおかげでフズヌもしてくれて」『うん』「うれしく思っているよ」『話しなさいよ（声を出しなさいよ）』・・・という風に直接の対話が引き出され、ひとしきり続く。話題が一段落すると、ユタの語りは再び間接話法に転じ、次ぎの話題に移行してゆく、という展開がみられるのである。

さてこの日の最大の関心事である④のハミウルシ（注9参照）は、神戸にいる次男にいった。多くの場合ハミウルシはカミがかり（号

泣、失神など）により誰に霊がおりたかを知るという。がこの場合はユタの口をとおして故人の意向が告げられた。主婦は、自分はすでに沢山祀っているのでこれ以上は受けられない、姉か同居の三男のところにいくように、と思っていたので平静でいられたとのことである。ただ次男にいったのは予想外だったようだ。

次ぎにユタBによる事例2と3に簡単にふれておく。呪詞や手順に違いはあるが[16]、供物をそなえ、シバタタキを〈ヒンデーワーヌ〉という呪詞で始め、フズヌエと請願をセットで行う、という枠組みはユタAと共通している。ただし名を呼ぶときは「ネ年生まれの思い子〇〇」などと一々エトをつける。また請願では島外への転出者も含め、子や孫のエトや住んでいる場所を一人一人あげて「石金のように頑丈な力を与えてくれ」とくり返す点がていねいである。このスタイルやフシまわしは、一九七〇年頃の映像にみられる同集落の名高いユタを踏襲しているように思われる。

事例2では、直系親族以外にも、呼ばれなかった主婦の兄や夫方のオジとその友達、嫁の母、海難事故死した隣家の主人などが次々と降りてきた[17]。主婦は「墓参りした時にみなおトモして下さいといってきたけど、呼ばれない人もあっちこっちから寄り集まってきて、つい本気になった。霊というのは不思議なものだねえ。亡くなってもこうしてみな会える。日柄が良かったのか」と涙ぐんで応対した。

また事例3では海で戦死した嫁の父が成仏していない、とのことで急遽供物をつくり、ユタとともに出征した和泊港に直行して拝んだ。嫁によれば三十三年忌はしたが、その後誰も祀っておらず、気になっていたという。

5、おわりに

以上フズヌエの詳しい分析はさらに課題としてゆきたい。ただ、旧正月の月に年中行事のごとく繰り返されている死者との対話が、コイのテクスト生成と深く関わっており、以下のような霊魂観を共有していることを確認しておきたい。

（1）後生（ぐしょう）（あの世）では死者は亡くなった時の年格好で、現世とかわりなく親族寄り集まって暮らしている。

（2）あの世は水も食べ物も不足する暗黒な世界との観念が強かった［柏 1975：111］。「にぞさやー（可哀想に）」という死者への声かけは、暗い土中に埋められ、戻りたくとも戻れないことへの憐憫の情が込められているのであろう。加えて死者は思いを語りたがっており、子孫による供養の機会を待ち望んでいる。特に海難事故死者や、祀り不足の死霊は、他の家のフズヌエやマーブシ（死後七日目頃までに行う最初の口寄せ儀礼）などに便乗して降りてくることもしばしばである。

（3）死者に届くのはフシづけられたことばであり、ウタにより情けをかけるのである。

（4）死者は、名を呼び「あなた」という二人称で語りかけられる存在である。日常の会話とかわらない口調で、具体的にその思い

が語られる。これは相当にユタの技術と想像力を要するのではないか。

ここにみられる霊の活動は活発で、アナーキーですらある。[18] 死者の霊は三十三年忌を経てもなお個性を失うことなく、リズミカルな周期性をもって名を呼ばれ慰撫される。そして生者の生活に具体的に関わり関係を持続する、という動的なあり方が示されているのである。特に海難事故死者で遺体があがらない場合、竜宮のカミへの供物がなければ海から浮かばれず、後生（あの世）で会うこともできない、との観念が根強い。死後八二年を経てもなお命日に供物が要求される例もある。ただし息子たちの代には昔の祖先のことはわからないだろう、との判断があり、事例1ではショージ執行者の死とともに祭祀もおしまいにする（ただし本人の霊だけは降ろして息子に祀らせる）。事例3でもショージ執行者（男性）は九七才と高齢であり、この人でおわらせるということであった。またショージ自体にも合理化がみられる。ショージゴーの場所が険しい崖下にあって危険であり、泉の水も枯れてきている。そこでショージゴーから石を貰ってきて家で瓶に入れ、水道の水を注いで代替することがユタによりすすめられている。花米占い、線香花占いなど機会あるごとに、ユタの口をとおしてこうした観念が広められていくのである。

ともあれ、対面的な歌掛け文化を保持してきた奄美において、死者との関わりも生者からの直接の語りかけを契機として二人称的に展開されるという事実には、今後とも注目してゆきたい。

【付記】 本稿は第二三回日本口承文芸学会沖縄大会（一九九九年六月六日）での口頭発表をもとにしている。フィールドにて貴重なご教示をいただきました先田光演氏はじめ沖永良部島のみなさまに、厚く御礼申し上げます。

注

（1）伊波普猷 1974「南島古代の葬制」『全集』五　平凡社、名嘉真宜勝ほか 1979『沖縄・奄美の葬送・墓制』明玄書房、宮城文 1972『八重山生活誌』沖縄タイムス社、谷川健一 1991『南島文学発生論』思潮社、松山光秀 1993「徳之島のクヤとその周辺の歌謡」『奄美沖縄民間文芸研究』一六、酒井正子 1996『奄美歌掛けのディアローグ』第一書房ほか各市町村誌、郷土誌など参照。

（2）ジョンソン 1994「死者のために泣き、生者のために嘆く―客家の女の哀悼歌」（ワトソン他編『中国の死の儀礼』所収　平凡社）では、社会的に孤立し劣位にある女性が、唯一公的に鬱憤を述べ立てる機会として捉えている。

（3）フズヌエ調査は、一九九八年二月及び九九年三月に、各々一〇日間ずつ行った。

（4）民俗誌家は「死んで即座より埋葬するまで泣き続けであるから、家族や近親の女共は声を泣き枯らしている。死後一週間位は墓参ごとに泣く」「坂井 1992 (1933) : 510」「遺体に接する女はすべて泣き女になる。当座の思いつきを述べながら、今にも悶絶する

かと思われる程に、声を上げて絶えず哀哭する」[柏 1975：119]と述べている。

(5) 初七日までは朝晩二回、以後四十九日までは毎日一回墓参する。また三日祭、七日ごとに七日祭の供養を四十九日までとりおこなう。[柏 1975：125]

(6) 近藤 [1989] によれば、一九八七年度の火葬場利用率は和泊町全体で八四・二%。

(7) 本土で船員をしていた弟に対しては、共通語で話しかけている。

(8) 「いけよ」という表現の含意としては、洗骨の際に肉が腐着することなく完全に骨化している理想状態も想定される。[酒井 1987：70]

(9) ショージ執行者の死去に伴い、ユタを頼んで行う後継者選定のための儀礼。一族が集まり夜間暗黒の中でシバタタキ（本文参照）するうち、欠伸、号泣、失神、忘我状態の人（男女とも）があらわれ、死者の霊（カミ）が降りたとされる（そうした人が出ない場合、ユタが神意を伺い指名することもある）。以後生涯にわたって儀礼を継承する。なお柏 [1975：127] には不慮死を遂げたものの霊を慰めるとあるが、国頭では必ずしも死因は限定されない。

(10) 国頭集落では、南のアンザ海岸の崖下に四つのショージゴーがある。湧水が流れ出る珊瑚礁の岩穴である [先田 1989：143]。

(11) 国頭民謡交友会で活躍、病院から一時帰宅すると必ず仲間と唄あそびをした。生前「死んでもけっして悔やむな、唄で送ってくれ」と言っていたので葬式や七日ごとの供養にはテープを流し、四七日（よなぬか、二八日目）の供養は唄踊りの実演で慰めた。そのことについて四十九日の供養の際に、ユタAを介し「二つの手を延ばして、手を握ろうとしたけどできなかった。有り難う、うれしかったよ」と死者からのことばがあったという。

なお、生前書き貯めていた歌詞が、一九九九年にシーサーファーム音楽出版より『沖永良部島・国頭の島唄』として刊行された。

(12) 供物の洗米（花米）を数粒膳にとって占う。また洗米を集めて膳に一盛りにし、頭上にあげてトート（拝礼）する。

(13) エトを示す一二本の線香を立て、煙のところにみえてくる死者を、当該線香が表すエトにより同定してゆく。例えば「ネ年生まれの人がいる。誰かな？」「〇〇おじさんだろう」という風に、ユタと依頼者が問答しながら決めてゆく。そして、灰の燃えぐあいなどによりそのメッセージをよみとる。なおハナとは、死者の霊が乗り移った状態をいう [先田 1989：142]。

(14) 戦死したりフナクブリ（船の難破）などで海死した霊はシジ神となって墓に居付かず風（ハジ）のように彷徨し、生きている人間に災いをもたらす。シジ神は屋内には一人では入れないものだといい、縁側の外でショージの供物も受け取るとされる [先田 1989：147]。またユタAによれば、畳の上でなく亡くなった死霊をシバナという。特に海難事故死した霊は海岸によりつき、不幸をもたらすとされる。

(15) 現在はすたれた《昔イキントー》のフシだと思われ、ユタA

は、昔カミ拝みをしている人が歌っているのを聞いて覚えたという。彼女はこの曲が近年まで聞かれた知名町で育っている。うたわれた歌詞は次ぎのとおり。

○切り捨てる松ぬ、若芽さくやりや／後生にめぬわ親、いきちめらやしが（切り捨てる松に、若芽さすことがあるか／あの世にいらした我が親を、生き返らすことができるか）

○ぐしょかちぬ道や、暗さあむでしが／まこと暗さりや、いきちいもれウシー（後生までの道は、暗いときいていますが／まことに暗かったら、生き返っていらっしゃい）

○後生じ札わたち、戻らんでしゃしが／後生ぬあんだ王が、むどしならんど　ウシー（あの世の札を渡して、戻ろうとしても／あの世のえんま王が、帰してくれないよ）

(16) ユタによってことばや手法が違うのは当然としても、同じユタでも語り口は一回ごとに違っており、その場その場で作られていく。呪詞も（構成やキーワードは一定のものがあるが）二度と同じことがいえない。フズヌエと請願の順序の違いなどもあるが原因は不明である。

(17) 注（13）参照。

(18)「全部トモして降りて下さい」との呼びかけに応じ、系譜関係で結ばれた祖霊以外にも、不特定多数の様々な縁者が降りてきて対話する。事例1の故Mも、旧正月に入り、あちこちの家で行うフズヌエに出てきたと聞くので、妻は「するときはちゃんとするから、あちこち歩くな」といってある、という。

基本文献

柏　常秋　1975『沖永良部島民俗誌』自家版

甲　東哲　1987『島のことば―沖永良部島』　三笠出版

近藤功行　1989「剖検率及び火葬率にみる南島の宗教観」『徳之島郷土研究会報』一五

酒井卯作　1987『琉球列島における死霊祭祀の構造』第一書房

坂井友直　1992（初版1933）「沖永良部島史」『郷土史撰集』第一巻　国書刊行会

先田光演　1989『沖永良部島のユタ』海風社

村武精一　1997『アニミズムの世界』吉川弘文館

山下欣一　1977『奄美のシャーマニズム』　弘文堂

（さかい・まさこ／湘南国際女子短期大学）